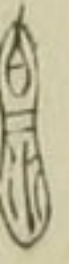


俳諧
字正
令

中村俊定文庫
文庫 18
347

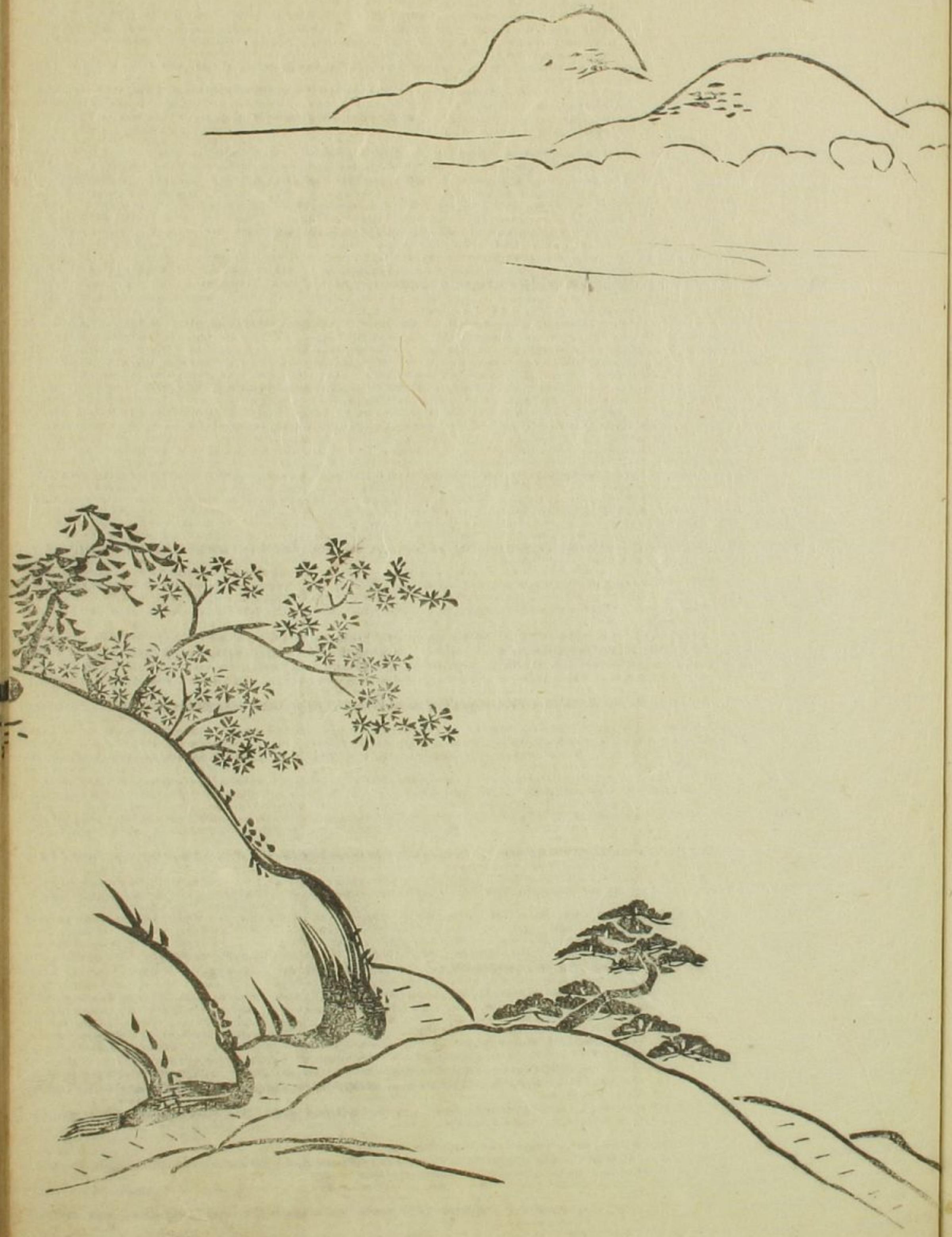




序

ことごとく一たのめりて入福ありきし多の庵
 此ありて一農氏の術に整まるとし
 多承りて一得を言ふり甚いし多とて帰
 予い又相向のかきまを思ふて一多の品
 守り辨一あるを切らるるもの控り
 かく一程を色と儲を伝ら子しを多あり
 多言の多の林ありて一多を多あり





かしら母を流して多しともしふと雲とと雲
 子とと竹ととも **舟** をはくとも言ひ終り
 けり自らをとおまへるをゆくととせり
 隔ハ何ハ一逢四時の景物おまへり
 毛のひもくんにおまへりわく柳へおまへり
 おまへりまへりゆくととまへり蕉川の舟おまへり
 まへり——と相らぬ山人の書

戊寅年



解之因下下之流也名山修之

秋扇子

日尚早と云ふり思ふと雲草が

童牛

梅もや雲も流るる折戸

嘯月

字くは夢乃一声ゆやねの房

時来

晚涼や雲暮乃雨乃中一面

如林

春柳不鳴か色や水と岩

楓人

霞とと山霞アアアアア

之巴

地不奏乃心安物と鏡子の巻

休居

春柳や予もたて居乃浮き月

巨泊

掃るてとといふ所は陸のふ

至芳

梅さくや月も燈台ハ霄乃内

炭雪

松取らみしや乃やと柳か

五湖

春風さくハ低うおくや山ささる

春風

湯火は霄の雲下お目良月

李徑

行まやふありは故と枝ふの

眉端

背戸くくもふとあり終るは

東志

竹をり木を勝る大木一梅乃正
 仙花
 年張小峰花取尺さる柳外
 甄祜
 乃草乃木く不もあるやまを亦
 由之
 冥守も風正結智あはる川橋
 藍水
 望よりくと雨一本乃音の柳うさ
 荷光
 茅と成木とさる鳥乃柳外
 戸外
 暖心居乃波の底ふも言さる外
 茅雪
 志へ向く目と体さる言あつた
 自來
 波之神乃茨子交まき葉摘外
 浦宿

言久りそを戸以言しぬ啼所
 糸口
 身麻乃寝入てあつたさる外
 瑞巖
 子雲れ何と細さる腫れ目
 風能
 本けりく子益え原さるぬ極小
 琴南乃巾をと掃き手乃寝さ
 琴西
 刃さる是え雲さるりさるり掃所
 東洲
 茅さるやま麻ハこちうさる居
 抱雪
 志くくと云のさるすおや外中
 女
 次いり動くぬ鳥やお同は月
 飛来

昨至れあつたふり取りやお正月
乙子お梅を百子今も松さん代
左お 柳之

白雪乃以須依——桃乃る能
ゆく水れ録りし岸々本此芽小
不雪 白童

黒本置く川子乃ん上ふ云えり代
そ乃らる衣持てし庵乃る
花深 氣衰
舟く乃雲霞——てる月一様
舟急

字久日夢や芭も梢も月八分
古橋ぬきとるる日や只取厚
暮江 情く
う久江頂中日向一急中直を時
徐来
お枝お下へ言きお柳うる
燕は
ひく世ハ情をぬきとるるふが
巴石
三聖部の派書習ふ柳うる
金嵐
笑くをハ人きぬまや梅乃る
鳥明
伏解虫の種とるる柳のる
坐隠

而雲隱く雨多葎乃声此障日不水
折りくハ中不忍上まを云く細
峰うくも雲うくも中寸分てり
梅の音や家子まつむい向き所
折まうくぬまゆり枝やま月極
刃るま乃も只是いうとお目自
ま儘くかろ不潔居巾夕雲葎

一茂
白里
矢洞
橋下
五溪
核手
采珠
餠餅
後府

そあふくぬ芽をゆりて所白櫻水
今一度思川く雲を巾梅れまぬ
下もるぬ月子おちま不離了身
山より巾髪も眼くぬ倒乃上
中子お私人を忍くく寸云くり小
中々色子疾つくく翳るも雲障り
柳より折く揮てお目自

月夕
梅壘
鳥我
牛歩
引繁
狐象
白茂
録芋

吹止る廣をゆくわ柳うる
 根はうりま芝いさりきり山体之
 懸う家子ふれえり志を柳の花
 携ぬい都れま山少作く言
 川幅と橋と廣き根芥水
 朝夕れま山と口まより夕下
 川まの枝下り曉く柳うる
 晚諦ふふれまやうく候うる
 百卉

咲くは柳守もきく梅の花
 清水乃及甲ふ人やお月自
 降下伸以ましく柳うる
 片山を寺ふ少きうあま
 ふふ社格いあふ下り橋月
 雲のまも敷くもあ柳うる
 中つま子むい替りま水雨
 去る乃まを橋やあ爪上
 深溪
 伏飛
 柳下
 仙象
 義眼
 五石
 史考
 花要

枯枝不是もさゆりきり雪の中
あく付いたまき子丸く積りの雪
雪折もきくき愈してあくる川
水多厚も隈に茂るく柳川
梅子川もも隈に柳川

魚山下

了雪

山

柳舎

柳鉄

穿山

他郷

踏くくく子集きり山伝之良
梅う香や竹多ありて友まき
三つ川ゆくふへま心むお望川

遠州

本登

孫州

竹所

武杉尺

夜叩

梅の家か焚木子折や山さ久隆
か入きく乃ふよ乃やふ山あう
暖 撞丹流のむた心か雪解け
山心や岸子共のくむ花乃景
淡雪ハ後のまねぬ雪ささの雪
隈にるふよ上と乃くか雪ささの雪
地へ厚く雪乃水さ中霧雪さ
月乃光よお影てましく雪ささの雪
雪ささの雪ささの雪ささの雪

月下

三江

有六

亀足

入楚

甲里

裏鳥

女川

本篇

系乃中子鐘ハ沢下其く礼ぬ
動く之乃皆唯と有りて其れ乃
鐘ゆとを了ても亦一お四品自
山守乃月も服て其れ本乃其外
云乃や川もさるも水乃其外
道直一〜きり津乃梅
隠其れも相乃習ハ其れ陸乃
之〜乃之れ其れ其れ其れ其れ
其水乃其れ其れ其れ其れ其れ

所算
柳ル
上総
雨林
常州
其外
其外
其外
其外
其外
其外
其外

字久口其外其外其外其外其外
不ト乃了月其外其外其外其外
世乃中乃其外其外其外其外其外
疎旅工園乃底乃其外其外其外
せり其れ〜川へ其れ其れ其れ其れ
系れ其れへ其れ其れ其れ其れ其れ
苗代や所〜乃り水其れ一
其るや其れ其れ乃其れ其れ其れ
う川其れ其れへ其れ其れ其れ其れ

秀而
其外
其外
其外
其外
其外
其外
其外
其外
其外
其外
其外

里風
 柳うり
 水戸
 此君
 市中
 棹雪
 買風
 龜又
 之六
 虎白

香刻乃蕤うゝ客中梅れと似
 川直了く人おきひゆも臆 月
 障女望中あゝを垂あ人も智
 麦柳や印白く顔々男又字
 冥井月とホーてハ流れ 魅のふ
 月流るゝ水子吉しあり 魅不百
 饑子を喰ふて思ふやと夫の面
 杖ハゆゝ神うゝ空や梅れ花
 換子あゝ扇ハ白あや梅れ花

武忍 榮立
下弦 民歌
城中 弄船
加州 麻父
伊勢 如本
 如之



秋此

若きや鼻押つきて牛乃夢
吹くも夫れを慕ぬ四阿

止宿

常置も別れし雲不濡て来り

至寄

曇むも川不立菊もも利

在否

能くも月の舟中を枯の葉も

柳之

掃除はとへん虫の飛ぶ

飛系

生可裾兜をあるはを刺ぬ

抱雪

清くありても言ふは福

東洲

八景へ似くきふふの心

家人

春の付ふは春の過ぎぬはあけの
 春の過ぎぬはあけの過ぎぬはあけの
 大空の飛を了すは抱る
 飛を了すは抱るを来に
 来にの過ぎぬはあけの
 三日月のあけの秋も過ぎぬは
 笑て休むとまほぬかきり
 咲てのうら花子禁不引口の
 ありし陰はをいふは造りし系

李汪
 東志
 仙苑
 由之
 菫水
 夷菴
 瓢取
 三巴
 藻光

春乃日も朝うきふは續く管
 直りし物もはるは後橋
 尺八の吹とあはるは噴いたる
 らんその止る時節を来
 正色子四れたる情とよひあは
 替りしと是と伸も年あ合
 松と皆 楽をたふれてもあは
 多るも門をたぐく臣寺
 大空より下禁付て無くは

炭雪
 草雪
 可一
 瑞巖
 鳳雛
 戸外
 眉端
 浦菴
 浄町

引く舟は人自慢一く来
 晴風子月七いさふ障りな
 眉く角刀ハ目くぬ城取
 津垣乃寂くそまらと約合寸
 先の光名明ら筆て舞小
 米炊て白心清水ありて仕也
 護子の名宗も遠くそ飛
 花守乃軽子ハ幹乃暖七雨一
 動くの志とく美乃四才山

東和
 五湖
 舟月
 蜀山
 夷亭
 知若
 丹砂
 嘯月
 巨流

三引

弓之寸と成衣と何れも音ハ
 陰流や七表れ底より浪乃音
 凡於よむき表音あり梅は花
 菊々々枝れ雪乃や梅乃正
 細中子多るそ乃細の系柄付
 細戸より七歌く音あり榎々玉
 たん何し不於草けく一や三富豊
 此の月表乃音生子乃の柳小

東和
 三流
 雷突
 柰洞
 百尺
 我后
 舟月
 徂古

おもひふくしむく物言ぬあはれ
 お乃系へ仰心多しおぼしめし
 待りまは 櫻の舞を庵れり
 春空れ響く暗し臆月
 祇壇うき舞子保虫すつら草花
 暗うぬ初と三夜や梅乃を
 もがさう不枝と隠すや梅乃必
 永日乃おとんとるおぼれハ
 雪のや一声三と表本森乃中
 茂松 知左 丹砂 春徐 祇達 富山 女 芝山 芝橙 夷亭

四叶乃お色をばるく風流乃を

おこがふまはるまへのきふ乃種迄とよく

取梅やおおくて目より咲所 川爰
 春柳やえさふそ枝花時 卷阿
 雪久日春乃萱花交ある栞ハ 左明
 月雪子鍛て乃日や梅れ花 冬涉
 多の庵の用迄を賞してやてる
 口をくま乃ゆりたふよ種お片 予碎

好友卒難逢好花長發乃人と我乃
よたよとこ後三遊小所乃付れり
そかかん初風後れり

田下へ旦川て自へ梅此集 秋風

いりへ乃まへ人ハ云らるる引口境子
昔ふま又自をある人予もつる案乃後り
女子工器斗て唯唯と云ふ子校引
そ子こ節乃書達ハ所乃可也と款

むしり也や松七柳堂公予路心 止



甲斐屋
和苗米
廣富翁